特別記事

日本ウマ科学会
第7回馬臨床獣医師ワーキンググループ
招待講演・症例検討会・実習について

樋口　徹，佐々木直樹

The 7th Equine Veterinarians Working Group's Invited Lecture, Case Discussion Forum and Workshop

Toru HIGUCHI, Naoki SASAKI

樋口　徹（ひぐち　とおる）
1985年帯広畜産大学大学院修士課程修了。同年，日高地区農業共済組合に奉職。翌年から家畜診療センターで診療・検査業務に携わる。
北里大学獣医学博士。専門は馬の二次診療と臨床病理。扱った急性腹症の開腹手術は1000頭を超える。
日高獣医師会副会長，日本ウマ科学会評議員・臨床委員，AAEP，日本獣医麻酔外科学会会員。

日本ウマ科学会獣医師ワーキンググループでは，2013年は馬の疝痛の臨床・研究・教育で著名なNathaniel A. White先生をお招きしました。眼科のBrooks先生，整形外科のRichardson先生，繁殖のLeBlanc先生，跛行診断のDyson先生に続いて5人目の海外講師となります。11月28日には美浦トレーニングセンターにて開腹手術実習を行いました。11月29日には北海道新ひだか町静内にてサラブレッド生産牧場向けに講演をしていただきました。11月30日は生産地の獣医師を集めて講義と検討会を行いました。12月2日（月），3日（火）に東京大学弥生講堂・農学部3号館教授会室にて開催された日本ウマ科学会第26回学術集会では症例検討会と講義をしていただきました。

招聘講師紹介

Nathaniel A. White先生は馬の急性腹症の獣医学書『The Equine Acute Abdomen』の編者，著者としてあまりに有名です。1971年にコーネル大学を卒業され，カリフォルニア大学デイヴィス校で獣医外科専門医となられ，1976年にはカンサス州立大で病理学修士号をお取りになり，その後はカンサス州立大，ジョージア大学で教えられたのち，ヴァージニア・メリーランド大学マリオンデュポンスコット・メディカルセンターで外科学教授として臨床・教育・研究を行われてきました。現在は名誉教授にあたります。『The Equine Acute Abdomen』以外にも馬の外科や跛行についての著書があり，学術論文も多数あります。ACVSやAAEPの重職も歴任された獣医学界の重鎮です。

JRA美浦トレーニングセンター競走馬診療所における実習

11月28日（木）にJRA美浦トレーニングセンター競走馬診療所において，White先生による獣医師向け実習が開催されました。実習内容は「馬の開腹手術のポイントと術後管理」であり，はじめに腹腔探査，小腸切除，空盲吻合術，回結腸吻合術，術後のモニタリングと管理方法について説明がありました。その後，馬を用いた開腹手術のデモンストレーションが行われました（図1）。JRA職員と開業獣医師を含む53名が参加しました。White先生は術後管理，腸管吻合について丁寧に教えてくれました。White先生は20数年前に一度来日した経験を持たれており，その時にもJRA美浦トレセンや生産地で講演や手術デモンストレーションをされています。その時よりも，日本人の英会話に対する反応が良くなっていると話されていました。

図1.　JRA美浦トレーニングセンターで実馬を用いた開腹手術実習が行われました。

図 2. 旧静内ウェリントンホテルが新装オープンとなったエクリプスホテルでサラブレッド生産者向け講習会を行いました。獣医師も多数参加しました。

エクリプスホテルにおける牧場関係者向け講習会

11 月 29 日（金）に美浦から北海道新ひだか町静内へ移動し，夜は新ひだか町静内のエクリプスホテルにおいて，日本軽種馬協会による White 先生による牧場関係者向け講習会が開催されました（図 2）。記名していただいた参加者だけでなんと 370 名を超え，ホテルの椅子がもうない状況でした。サラブレッド生産地でいかに馬の疝痛が恐れられ関心を持たれているかを示していると思われます。White 先生は文献から疝痛の疫学情報（発症率，死亡率，etc.），疝痛の危険因子（年齢，分娩前後の低カルシウム，寄生虫，穀類の多給，さく癖，etc.），開腹手術による生存率，疝痛の予防方法について具体的に教えてくれました。

日本軽種馬協会（JBBA）静内種馬場総合研修センターにおける講演会ならびに実習

11 月 30 日（土）に新ひだか町の日本軽種馬協会（JBBA）静内種馬場総合研修センターにおいて，生産地の獣医師を対象に講習会および検討会が開催されました。午前中は，「疝痛後の馬の栄養」というタイトルで疝痛後あるいは開腹手術後にどのような栄養管理をするか，なぜ栄養管理が必要なのかを解説いただきました。経腸，非経腸栄養投与の具体的方法や長所と短所についても実践的に教えてくれました。

午後は，9 名の参加者がスライドを用いて症例で感じた課題や疑問を提示し，White 先生からコメントをもらいました。エンドトキシン血症や SIRS や DIC の定義と対処方法，結腸捻転と結腸固定術の方法，結腸捻転での虚血性損傷の評価方法，盲腸便秘への内科的外科的対応，いくつかのタイプの小腸閉塞，仔馬の鼠径ヘルニアなどさまざまな質問でしたが，White 先生はとても丁寧に答えてくれました（図 3）。White 先生を交えてディスカッションをしたいと考えていましたが，圧倒的な知識と経験に教わることばかりでした。外科手術の症例以外についても質問を受けたかったのですが時間が足りませんでした。

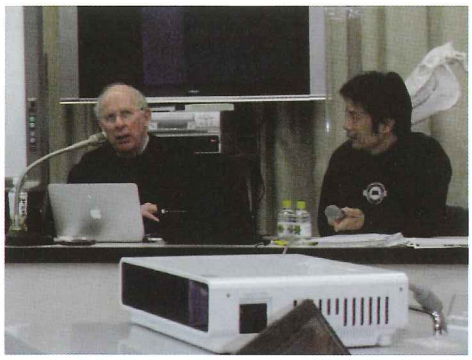


図 3. JBBA 静内における検討会での White 先生と石原先生

図 4. JBBA 静内での講演・検討会を終えて White 先生と。左より筆者（樋口），Dr. White，石原先生，田上先生，宮越先生。

この二日間は麻布大学石原先生に通訳をいただきました。たいへん滑らかで正確に通訳していただき充実した講演会と検討会になりました（図 4）。

馬臨床獣医師ワーキンググループ症例検討会

東京での症例検討会は，5 名のパネラーにより症例が紹介されました。腸間膜裂孔ヘルニア（HBA 宮越先生），*Clostridium difficile* 腸炎（JRA 黒田先生），結腸固定術後の分娩末期の疝痛（NOSAI 日高七尾先生），消化管型リンパ腫（日獣大松本先生），若齢サラブレッドの癒着疝（SHC 田上先生）といずれも興味深い症例と課題でした。White 先生は送ってあった症例について

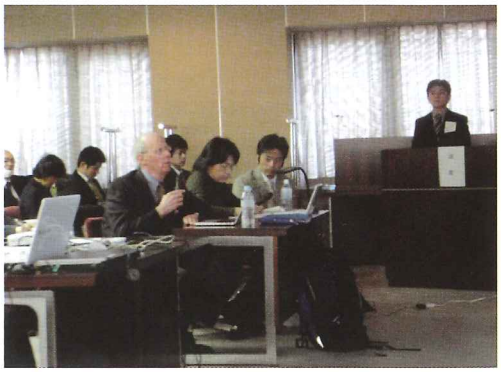


図 5.　ウマ科学会の症例検討会での White 先生。

回答用のスライドも用意されていて，詳細なコメントとアドバイスを下さいました。会場からの質問も多く，これ以上時間の延長が許されないのが残念なほどでした（図 5）。

馬臨床獣医師ワーキンググループ招待講演

本年度の馬臨床獣医師ワーキンググループ招待講演は，White 先生により「馬の疝痛；臨床診断と手術決断」の講演が開催されました。日本でも馬の疝痛の開腹手術は年間 200 例近く行われています。しかし，そのほとんどは北海道の馬の密度が高い生産地と JRA のトレセンでのものです。これから他の地域でも疝痛馬の開腹手術が増えていくと思われますが，そのためには的確な診断と手術適応の判断が必要です。White 先生の講演は疝痛の診断について基本から直腸検査や腹水検査，さらには鎮痛剤の使い方まで，実践に役立つ内容でした。手術適応の判断について述べておられた，「疑った時には何かある」は長年の経験からのまさに金言だと思われます（図 6）。

企業展示

今年度も昨年同様，弥生講堂前の ANEX を利用させていただき，ゴールドスポンサーのドルニエメドテックジャパン株式会社をはじめとする国内 21 社の協賛による企業展示が行われました。今年は，スタンプラリーを企画させていただき，企業ブース 6 ゾーンでのサインを集めると，豪華賞品の当たる抽選会を開催いたしました。獣医療機器や薬剤，飼料添加物を目の前に，業者の方を交えながら馬獣医師同士で情報を交換しあう光景がたくさん見受けられました。協賛いただきました企業関係者に衷心より感謝申し上げます（図 7）。

図 6.　特別講演のあと White 先生には感謝状と記念品を贈呈しました。

図 7.　企業展示会場では，国内 21 社の協賛による企業展示が行われました。

結語

今回で馬臨床獣医師ワーキンググループの症例検討会・講演会・実習は 7 回目となりました。White 先生の The Equine Acute Abdomen の初版には，「学び続ける人生の価値を教えてくれた父に捧げる」と献辞があります。White 先生は 44 歳で The Equine Acute Abdomen を出版され，62 歳で第 2 版を出され，当年 67 歳だそうです。White 先生の業績を知り，講演を聴くとまさに学び続けた人生の成果を知る思いでした。私たちも馬臨床獣医師として学び続けたいものです。

なお，東京大学弥生講堂での招待講演および JRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所での実習の模様を DVD としてライブラリー化する予定にしております。DVD 販売の申し込み方法については，後日，日本ウマ科学会ホームページなどにてご案内させていただきます。2014 年の第 27 回日本ウマ科学会学術集会では，第 8 回馬臨床獣医師ワーキンググループの企画として馬蹄病学専門の先生を招聘するよう準備を進めております。会員の皆様のご参加をお待ち申し上げております。

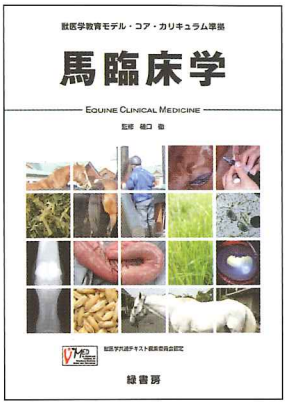
書籍紹介

『馬臨床学』

監　修：樋口　徹

出版社：株式会社緑書房（TEL. 03-6833-0560）

定　価：本体4,800円（税別）　B5判・並製　2段横組　224頁　オールカラー



日本の獣医学教育は，今，大きな変革の時を迎えている。

獣医系国公私立16大学で構成される全国獣医学関係大学代表者協議会は平成23年，“新しい獣医学教育の方向性と獣医学教育者の責務に関する声明”を公表し，大学における共同学部や共同学科の設置，コアカリキュラムの作成，見学型実習から参加型実習への転換とそのために必要な共用試験の導入，分野別第三者評価機構の整備などを提言している。これら一連の改革案は，日本の社会が獣医師に求めるニーズが多様化してきたことや，グローバル化に伴って国際的に通用する獣医師を養成する必要性が高まってきたことに応じるもので，すでにその一部は具体化され，また実現に向けた準備が着々と進められている。

『馬臨床学』は，全国獣医系大学の共通カリキュラムとして策定された獣医学教育モデル・コア・カリキュラムの講義51科目を収録する全39冊の共通テキストの中のひとつで，馬のことだけ書かれた唯一の教科書である。

本書の監修者である樋口徹氏は，サラブレッド生産の中心地である北海道新ひだか町の家畜診療センターで馬の診療，特に高度な診断と二次診療を手がけている獣医学博士で，大学の講義や研修活動にも力を注ぐわが国を代表する馬の獣医師のひとりである。さらに執筆陣も，樋口博士をはじめ，元JRA競走馬総合研究所の兼子樹廣博士，帯広畜産大学の南保泰雄博士，同じく佐々木直樹博士，鹿児島大学の三角一浩博士，JRA競走馬総合研究所の和田信也博士といったそうそうたる6名であり，近年ではわが国初となる“日本人が書いた日本の馬のための臨床学教科書”にふさわしいメンバーと言えよう。

ページをめくると，第1章の馬学一般と第2章の馬臨床学総論には，参加型臨床実習を受ける学生に必須の獣医学共用試験に出題される内容が網羅されている。馬学一般では，個体識別法や歩法など，他の家畜ではほとんど取り上げられないであろう馬に特徴的なことがらが丁寧に説明されている。また，動物としての進化や人の文明とのかかわりなど，馬ならではの記述も多い。馬臨床学総論には，跛行診断やワクチンプログラムなどの馬に固有の診断法や防疫対策，あるいは抗生物質の使用法や外科治療法など，馬に特有で知っておかなくてはならない知識や技術があまねく記載されており，馬を専門とする獣医師が書いた教科書ならではと言える。一方，第3章以降は，循環器・呼吸器疾患，消化器疾患，運動器疾患，眼科疾患，臨床繁殖学・産科学について，それぞれ詳しく書かれた各論であり，共用試験後の参加型臨床実習の進行とともに学習することのできる，アドバンス教育に対応した内容となっている。

文章は，学生向け教科書にふさわしく明快かつ簡潔で，各章の最後には演習問題とその回答が掲載されるなど，新しい獣医学教育を意識した工夫が随所に見られる。また，多くのページに写真やイラストが配置されており，その豊富さと見た目の楽しさは初心者の理解を大いに助けるであろう。しかし，改めてそれらの写真をよく見ると，馬の専門家にとっても初めて目にする貴重なものが多いことに気づく。この本で学んだ学生はそれだけで同時に，かなりの専門的な知識も身につけることができるだろう。

獣医学教育の改革をもたらしている社会ニーズの多様化と国際化は，馬の獣医学にもまた大いなる変革をもたらすかもしれない。わが国に100万頭の馬が飼われていて，獣医学と言えば馬医学であったのは僅か70年前のことである。この先，馬の獣医学が再び脚光を浴び，『馬臨床学』がそのエポックとなった本として再び紹介される，その日を待ちたい。

（JRA競走馬総合研究所　所長　安斉　了）